

## 教職員の生成 AI の利活用に関する考え方

東京学芸大学 高橋純

### ○文科省ガイドラインと実証的な取組を踏まえて

・「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン (Ver2.0)」では、「適切な指導計画や学習環境の設定、丁寧な見取りと支援といった、学びの専門職としての教師の役割は、生成 AI が社会インフラの一部となる時代において、より重要なものになる。」と記載されている。

・クラウド環境での業務に既に慣れている学校であればあるほど、新たなツールである AI もうまく活用できる傾向にあるが、AI の活用から入る学校は活用方法が頭打ちになる傾向が見られる。多様な児童生徒への対応をはじめ学校に求められる役割が大きくなっているからこそ、働き方改革につなげていくためには業務プロセスを丁寧に整理し、何が校務・指導改善に資するかを精緻に分析し、AI-Ready な校務の形を目指し、更に深い実証を進めていく必要がある。

### ○国際的な動向 (OECD Digital Education Outlook2026<sup>1</sup>、UNESCO AI competency framework for teachers<sup>2</sup>等) を踏まえた知見と求められる対応

・AI は教員の業務を代替/補完/拡張するという 3 つの概念で整理されている。学校現場での AI の実装を進めていくためには、これらのフレームも念頭に置きつつ具体的な事例を整理し、効果の見える形で周知・必要に応じて利活用に関するガイドラインを改訂していくことが求められる。

・また、OECD のレポート内では、AI ツールを活用し指導実践を行った研究において経験の浅い指導者等に特に有効であったという示唆がある。授業の質保障のために AI ツールを活用することもできる。

・一方で、認知的オフロードの発生、メタ認知的怠惰、主体性の喪失等といったリスクも OECD より指摘されている。若手教師が AI に依存しすぎず中長期的に教師としての資質・能力が育成されるよう配慮を行う必要があると考えられる。

・UNESCO のレポートでは、AI に関連する 5 つの観点 (人間中心、倫理、基礎と応用、教育学、専門性開発のための AI) に対して、習得 (Acquire) 深化 (Deepen) 創造 (Create) という 3 つの段階で整理をされている。単なる AI の活用方法の習得 (Acquire) に留まるのではなく、自らの業務を抜本的に深化させ、新しい働き方を創造するような方向に進んでいくことが求められる。

### ○AI の浸透による社会の変化・学校現場の変化

・社会では、生成 AI を用いて作成され見た目は整っているが中身が薄く、実際には業務や意思決定を前に進めない「役に立たない成果物」を指す造語として「ワークスロップ<sup>3</sup>(Workslop)」という問題も指摘されている。AI を活用し校務を進める世代が増えてくるからこそ、教育的価値を中心に置き、教師でなければならない仕事に時間を割くことができるよう学校現場に事例を周知することが求められる。

・また、AI に児童生徒の成長に係る責任は取れない。AI を含むデジタル学習基盤が当たり前にあるからこそ、よりメタに子供の学習環境を設定し、見取り、指導を行う教師の仕事が重要となる。

<sup>1</sup> [https://www.oecd.org/en/publications/oecd-digital-education-outlook-2026\\_062a7394-en.html](https://www.oecd.org/en/publications/oecd-digital-education-outlook-2026_062a7394-en.html) (2026年4月29日アクセス)

<sup>2</sup> <https://www.unesco.org/en/articles/ai-competency-framework-teachers> (2026年4月29日アクセス)

<sup>3</sup> <https://dhbr.diamond.jp/articles/-/12882> (2026年4月29日アクセス)